

笛吹市探訪

第55回

笛吹市の史跡⑭ 石和本陣跡 (いさわほんじんあと)

笛吹市指定史跡の石和本陣跡のある石和町市部は、江戸時代に甲州街道の宿場しゅくばとして栄えました。

宿場にはさまざまな施設が整備され、公的な機能を果たす機関がまとめて置かれ、宿役人しゆくやくにんは隔年交代で9人が勤めていました。

宿場の重要な役目は、公用の人・物資・書状などを人馬を使って次の宿まで無事に



石和本陣跡 (後藤家)

搬送することでした。このため、宿役人は住民を組織して、旅行・運輸・宿泊を担当させたのです。宿役人の長は問屋といや、補佐役は年寄としよりと呼ばれ、石和にはそれぞれ問屋1人、年寄3人がいました。

仲町に入った道の北側には、高札場こうさつばがありました。石和宿には、仲町の西端の街道北側に本陣一軒と脇本陣二軒があり、そのすぐ西側にも高札場がありました。

高札とは法令を庶民に知らせる・公示の方法の一つで、奈良時代からありましたが、特に、江戸幕府は制度化して、厳格に維持するよう努力しました。

通常、高札は、往来の多い道路の脇、町の出入り口や中心部、関所や橋のたもとなどに掲げられました。このような場所を高札場と言います。

江戸時代の本陣は宿場の宿泊所で、大名・旗本・幕府役人・勅使ちよくし。天皇の使いのことなどに使用が許され、宿役人の住居が指定されることが多かったようです。指定された方はわずかな謝礼を得ることもありましたが、出費がかさんで大変でした。ただ、名字帯刀みようじたいとうが許され、一般には禁止されていた門や玄関を構えることができ、名譽なこととして受け入れられていたのです。

石和宿の本陣は、仲町の甲州街道北側の後藤家で、間口は十一間という広いものでした。宝暦11(1761)年、高遠城主内藤大和守たかとおじようしゆないとうやまのかみ江戸への参勤交代の際に使用するため、後藤甚兵衛じんべえに本陣を命令しました。

明治3年には、明治政府が本陣を廃止しましたが、後藤家では、屋敷を旅籠はたご。旅人を宿泊させ、食事を提供することを業とする家として使用しました。明治13年の石和大火で建物は消失し、今では土蔵一棟が残るだけですが、後藤家には大名の書状や古文書が多く残されています。

石和宿の住人とその持ち馬は、宿役人の部下である馬指うまさしによって集められ、馬役また人足を勤めました。彼らの多くは農民でしたが、ほかに医師、鍛冶かじ、紺屋こうや。染物屋のこと、大工、桶おけ屋、畳屋、髪結いかみゆいなどもありました。中でも、紺屋は数も多く、笛吹川を利用して染液が盛んに洗われていたことが分かります。

助郷すけこうと言って、石和宿近隣の村々の住民たちも労務にかり出され、早朝・夜間かまわずに労役を課されました。報酬はわずかで、負担は重かったようです。